慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャトーブリアンにおける記憶の想起と憂愁
Sub Title	La mémoire et la mélancolie chez Chateaubriand
Author	大崎, 周平(Osaki, Shuhei)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.15, (2010.) ,p.33- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20101201-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャトーブリアンにおける記憶の想起と憂愁

大崎　周平

1.　はじめに

シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』には、過去の記憶が突然甦るという場面が頻出する。こうした場面はプルーストが『見出された時』の一節で引用し、マドレーヌ菓子によって喚起された時間の啓示と同様の感覚であると認めていることでもよく知られている。また記憶の想起体験に関する両作家の見解の類似点と相違点についても、既に幾人かの批評家の考察の対象となってきている[1]。ボードレールも「各々の作家は多かれ少なかれ主要な能力によって刻印されている。シャトーブリアンは倦怠と憂愁の痛ましい栄光を歌った[2]」と述べているように、シャトーブリアンの特質をなす憂愁に満ちた作風は、記憶を想起する場面にも窺うことができる。ボードレールはまた、『現代生活の画家』の中のコンスタンタン・ギーズに関して語った箇所で、過去の事物を自在に再現できる記憶の機能を芸術作品の根源として重要視すると同時に、記憶が呼び覚ますものすべてを十分に表現することはできないのではないか、という芸術家にとり憑く恐れについても指摘している[3]。記憶の儚い反映によって構築されたシャトーブリアンの『回想』でも同じく、その中心原理は記憶に他ならないが、回想録作家が過去を想起し、再現できる自分の記憶力に対してかなりの信頼を寄せているにしても、自己の内面及び外部の世界を含め、万物が絶えざる生

---

[1] 最も代表的な研究書として、リシャールによる以下の著作を挙げることができる。Jean-Pierre Richard, *Le Paysage de Chateaubriand*, Seuil, 1967, p.106.

[2] Baudelaire, *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t.2, 1976, p.117.

[3] *Ibid.*, p.699.

成変化の掟に従う世界の中では、記憶の性質も刻一刻と変化してゆき、捕えようもなく逃れゆくものである。だからシャトーブリアンは、既に存在しない過去や死者たちを甦らせること、「あの世の奥底の凍った肖像を甦らせ、地下墓所に下りてゆき、そこで生命を演ずる[4]」ことがいかに困難であるかを嘆息せざるを得ない。

ところで回想録を書くことは、過ぎ去った自己の人生を再創造し、それを再び生きることでもある。そしてもはや未来のない老境の身にあるシャトーブリアンにとって、記憶には現在の自己の感受性や判断力に限らず、人格全体の基盤を構成するものとしての役割が認められている。とはいえ記憶の想起は、喪の悲哀に沈みがちな回想録作家にとって、もはや取り戻しようもない過去と現在との時間的な隔たりの大きさ、既に存在しない死者たちとの埋め難い距離、つまりは人生の中でどれほどのものを喪失したのかをより鮮明に実感させもするので、大した慰めとなるわけではないようである。

シャトーブリアンにとって、忘却の淵に沈みかけた過去を想起し再現することが困難であることにもまして、何よりも過去とはあまりにも変幻自在の様相を呈し、統一的なイマージュとしては把捉することができないのである。また自分自身でさえもが人生での様々な段階と状況に応じて移り変わってゆき、各々の時期に異なる性格、感情、思考を持つ存在であるので、過去との恒常的な関係を保てない、という無力感に浸された洞察が彼にはある。そのように「忘れ、また忘れられる空しさ[5]」を運命づけられた人間の、複数に分裂した人生の様態に起因する悲嘆が、『回想』に貫流する陰鬱な色調の一要因をなしている。結果として青年時代を語った『回想』第 1 部の結末部分では、「記憶により再現された青年時代の喜びは、松明の光で見られた廃墟のようなものである[6]」という認識に至っている。記憶を

---

[4] Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, éd. Jean-Claude Berchet, Classiques Garnier, t.2, 1992, p.19.

[5] *Ibid*., p.19.

[6] Chateaubriand, *Mémoires-d'outre-tombe*, t.1, Classiques Garnier, 1989, p.638.

想起することは、松明にも喩えられる微かな光を頼りに、記憶の打ち棄てられた残骸が散らばる光景を見るようなものであり、それらはもはや蘇るということはない。

本稿では、コンブールでの少年時代を語った『回想』最初の 3 巻分を中心にして、思い出を想起する際に付きまとう憂愁を見てゆくことで、シャトーブリアンに固有の詩学の一傾向性を検証するつもりである。

2. 記憶の想起と自我の不連続性

『回想』では、過去が語り手の記憶の中に突如として強烈な衝撃を伴って甦るという場面が繰り返し描かれており、そのような無意志的記憶の作用が『回想』の顕著な特徴となっている。様々な記憶が反響のように甦るとはいえ、実際のところ過去との距離を痛感させることになるので、しばしば絶望を深める結果に終る。その点で記憶とは、自己の人生の連続性を感じさせるというよりも、現在の生存を無味乾燥なものに思わせ、確固たる自己同一性をも疑わせるような酷薄な性質を持つものである。記憶を想起することによって時間の不可逆の流れを克服できるというわけではない。たとえ過去を想起し再現できたとしても、過去の影像は当初のままの魅惑や新鮮さや強度を保っていることは滅多になく、むしろ無惨にも色褪せ、掴みどころなくぼやけたものとなっている。このように記憶の中に失った対象を見出そうとしても、肝心のものは見つけられないまま、過去の暗闇の中で途方に暮れることになる。人格の連続性と記憶の確実性、または時間の破壊作用に打ち勝つ永続性など、時間の啓示を歓喜と共に受けるというわけではなく、シャトーブリアンは憂愁に浸された冷徹な認識を保ったままであることが多い[7]。

そのように時間の経過により万物が破壊され、取り返しようもなく失わ

---

[7] このような『回想』の基調をなす自我の不連続性と時間意識全般について論じた先駆的な研究として、アンドレ・ヴィアルによる以下の著作を参照のこと。André Vial, *Chateaubriand et le temps perdu : devenir et conscience individuelle dans les“Mémoires d’outre-tombe”*, Julliard, 1963.

れてゆく世界にあっては、記憶を想起することも幻のような印象を覚えさせるのである。自我には確固たる基盤もなく、したがって自己同一性も確保できない。時間の経過の中では、確かに過去の記憶は完全に忘却されるわけではなく、ある人についての記憶はその人の実人生よりも永続することが稀ではないにしても、自分自身でさえもが自分にとって同一ではなく、過去に覚えた感情も自己の人格も逃れゆき、自己は各々の瞬間によって異なる存在に取って代わられる。そのような自己の不連続性の認識ゆえに、もはや過去とは自分にとってでさえ無縁の事柄のように思えてくる。『イタリア紀行』に収められた 1803 年の手紙でも既に、「二度と見ることのない時間、事柄、人物によって、人は各々の瞬間に死ぬのである。人生とは連続的な死である[8]」と捉えている。絶えざる有為転変の掟に晒された人間には、自己についての揺るぎない認識を持つことができず、記憶は自己の完全な存在を再構成できないのである。少年時代の逸話の結末部分で、コンブールを旅立つ前に生家のあるサン・マロを訪れた際には、「まもなく私は故郷を離れ、様々な土地に人生を分散させようとしていた。その考えは死ぬほどに私を苦しめた。私は波間に飛び込もうとした[9]」と苦々しく語っている。個人の生とは連続的なものではなく断片的なものであり、感情も自己を取り巻く状況も絶えず変化してゆく。一つの自己が死ねば、新たな自己が生れる。人生の持続の中を生きることは、自分自身が絶えず変化してゆくことにも等しいのである。

3.　少年時代の記憶

本稿では少年時代を語った『回想』の最初の 3 巻部分を、記憶の想起という点から見てゆくつもりである。シャトーブリアン自身、序文でも述べているように、回想録の中で彼が最も愛着を抱いている箇所は、故郷コンブールで過ごした青春時代について語った章である。その時期が個人の人

---

8 Chateaubriand, *Voyage en Italie, Œuvres romanesques et voyages*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléaide, t.2, 1969, p.1450.

9 Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, p.234.

格形成に決定的な影響を及ぼし、その後の人生の方向性を決定するほどの重要性を持つことはいうまでもない[10]。コンブールの森を散策する中で初めて感じたミューズの息吹、無限への渇望に苛まれた憂鬱な夢想と倦怠、愛の幻想、死への誘惑など一連の体験を通して、自己の人格や気質、その後の作家としての天命といった個人の根幹部分が形成された特権的な時期である。そのような過去を探求することは、現在の自己の謎を解明する上で有益な手段となる[11]。故郷コンブールはシャトーブリアンの全作品を通して周期的に出現する場所であり、異国を旅する際にも故郷と類似した光景に触発されて反響のように故郷の記憶が甦るという場面が頻繁に見受けられる[12]。そのような無意志的記憶の想起の場面で重要性を帯びているものは、喚起される感情や感受性の強烈さである。実際、シャトーブリアンは休暇中に滞在したコンブールの城館のことを書く段となると、執筆を中断せねばならない程の胸の高鳴りを覚え、「記憶の中で甦る思い出は、その活力と膨大さで私を打ちのめすのだ[13]」と語る。回想している当人にとってしか重要性を持たないような個人的で瑣末な事柄であっても、それが長い歳月の間の忘却の深淵から奇蹟的に甦ったという事実によって、やはり深い感動を呼び覚まさずにはいられない。シャトーブリアンにとっては、そのような個人的な性格を持つ感情的記憶が最も重要な記憶となる。若き日々の瑞々しい感情が付随する記憶は、冷静に表現することもできず、同時に想起される感情のためにより魅惑を帯びたものなのである。そのような記憶は後で見てゆくように、つぐみの鳴き声によって故郷での少年時代を想起

---

10 「私が自分自身になったところ、私が全生涯を通して引き摺ってゆくその倦怠と、自分の苦悩と至福をなすこの悲しみの最初の徴候を感じたのは、コンブールの森であった」（*Ibid.*, p.236.）と『回想』3 巻の結末部分で述べている。

11 『墓の彼方からの回想』の初稿『わが生涯の回想』（*Mémoires de ma vie*）では、自己の「説明し難い心」（*Ibid.*, p.7.）を探求することが主な執筆動機であったが、少年時代を語った箇所はその当初の意図を直接反映している。

12 *Ibid.*, pp.186-187.（「何度もアメリカの森で太陽が沈むのを見ながら、私はコンブールの森を思い出した。自分の記憶は反響するのだ。」）

13 *Ibid.*, pp.166-167.

する場面にも典型的に認めることができる。

またシャトーブリアンは、序文で自分のみが知っている過去の世界を呼び覚まし、記憶を遡ってゆくという意図を表明する際にも、「自分が知っている人たちの中でどれほどの人が今日でも生きているのか[14]」と述べ、人生の無常に嘆息をもらしている。既に失われてしまった少年時代と自分のみが知っている人々を思い起こし、彼らのことを書き残すことは、冥府降りにも喩えられる困難な試みではある。しかしそれはまた語られることがなければ消え去る宿命にある儚い事柄や人々を記録することによって、一瞬でもそれらの記憶を忘却から救い出そうとする試みでもある。回想録を書くことは、消えゆく記憶を甦らせ、永続させようとする回想録作家の執筆動機を反映しているといえよう。そこでシャトーブリアンは墓の彼方の立場から、自らを死者たちの代弁者として、または死者の側に属する半ば死んだ人間として位置づけ、言葉と文学作品の力によって既にこの世には存在しない人々を弔うかのように甦らせるのである。シャトーブリアンは歴史上の動乱の目撃者に倣って、滅びゆくものを記録する最後の証言者として、死者たちの人生を想い起こし、忘却の虚無から救い出すべく彼らにまつわる記憶を書き残し、保持しようとするのである。というのも、ある人についての記憶を忘却することは、その人の決定的な死をも意味するからである。

そのように墓の彼方の立場から語ることで、語り手はある程度、運命の桎梏から解放され、達観した観点を確保することができる。世界の事物を一通り享受しつつも、それらが儚い幻影であることを自覚しているシャトーブリアンは、物事を描写する際にも、現実の事柄一切の空しさを暴くのである。皮肉な眼差しによって現実から距離をとり、虚無的な姿勢で眺めること、それがシャトーブリアンのメランコリックな作風の基調をなしているのも確かである[15]。ともあれ既に消え去った事物を書き残すという意図

---

[14] *Ibid.*, p.119.

[15] この点については以下の論文に詳しい。Bernard Sève, « Chateaubriand, la vanité du monde et la mélancolie », *Romantisme*, n.23, 1979, pp.31-42.

には、死を超える芸術作品によって、現世の人間と墓の彼方の死者との間に、一種の信徒共同体のような照応関係を樹立しようとする芸術観が窺えるのである[16]。

さて『回想』の 2 巻冒頭では、シャトーブリアンは少年時代からいかに卓越した記憶力を持っていたのかを披露する中で、記憶の性質について考察している。彼はドルでの中学時代には、ラテン語や数学に秀で、対数表まで暗記でき、教会でも司祭の説教を反復することができるほどの記憶力の持ち主であったと語っているが、そのような感情の記憶を伴わない抽象的な知識に関する単純な記憶でも、個人の人格を構成する上では欠かせない能力であると示唆している。そして最後には、以下のように考察を続けている。

> 記憶がなければわれわれがどうなっていたであろうか。われわれは友情も愛も喜びも仕事も忘れていたことであろう。天才も己の思想を結集することができないであろうし、この上なく情愛に満ちた心でさえも、もし思い出すということがなければ、優しさを失ってしまうであろう。われわれの人生は絶えず流れ去る現在の連続的な瞬間と化していたであろう。過去がもはや存在しないのであれば。惨めなことだ！われわれの人生とは、記憶の反映に過ぎないほどに空しいものなのだ[17]。

シャトーブリアンによれば、記憶の機能とは過去を現在と関連させながら想起することによって、自我の連続性と同一性を保証することにあるのだが、またそれゆえに記憶は、断片として分散する人生の各々の瞬間に、

---

[16] このような信念は、現世では生き別れとなった親しい者同士の、神の恩寵による彼岸世界での復活と再会を約束するキリスト教教義とも共通するものであるが、そのことはジャン・クロード・ベルシェも「正しく語るためには、鏡を通過せねばならない。遺品、強迫観念、記憶を語るためには死を通過せねばならない」（Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, Préface, p.LXV.）と述べている。

[17] Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, p.174.

一貫性を与えることができるのである。ここに見られる記憶の機能を自己意識の根拠とする発想は、18 世紀の感覚論が大々的に展開した主題であり、そのことはジョルジュ・プーレが『人間的時間の研究』の導入部分、ヨーロッパ文化圏における時間概念の梗概を示した箇所で述べている通りである[18]。

上記の引用文で、シャトーブリアンは「惨めさ」というアウグスティヌス流の伝統に属する概念を、記憶の中心的な役目についての考察に関連づけているのが確認できる。啓蒙思想家たちにとっては、記憶の役割とは時間の中で自己を形成し、自己についての意識を構成することのできる人間の能力の一つの印として考えられていたものであった。他方、シャトーブリアンにあってそれは人生が各人の記憶の不確かな反映でしかないことを実感させるので、人間の惨めさの徴候と看做されているのである。

確かに記憶とは、現実の事物一切を変質させ、破壊し、消滅へと絶えず追いやってゆく時間に内在的な破壊作用によって細分化された不安定な人生に、連続性の感覚を与えることができる。そこに無慈悲な時間の経過によって惹き起こされる悲嘆を宥める機能を認めることもできよう。しかし記憶の機能を考察してゆく中で、結局のところ人生とは記憶によってかろうじて連続性を保つことのできる反映に過ぎない、という悲観的な認識に至っている。逆説的にも、人間の自己同一性の根拠となるはずの記憶の作用は、記憶によりかろうじて再現された影像としてしか把捉できない人生の空しさを無惨にも露呈してしまうのである。記憶によって過ぎ去った人生を取り戻すことも、一貫性の下に再統合することもできない。人間の人格と生存がそのような記憶にのみ依拠している以上は、人生とは虚無でしかないと失意と共に結論せざるを得ないのは必然であり、そこには人間の生の空しさを嘆いた旧約聖書『伝道の書』の「空の空」にも連なるメラン

---

18 「十八世紀の偉大な発見は、従って記憶の現象の発見である。思い出によって人間は瞬間性から逃れる。思い出によって人間は存在のあらゆる瞬間の間に見出される虚無から逃れるのである。」（Georges Poulet, *Études sur le temps humain*, Plon, 1950, p.XXIX.）

コリーが濃厚に表れている。

感情的記憶によって想起される過去が、生の空しさを決定的に自覚させるという同様の構造が、あまりにも有名なモンボワシエ庭園でつぐみの鳴き声を聞く場面にも見出せる。秋の風、夕日、イギリス風の庭園、塔などいずれもコンブールの寂寥とした風景を思わせるようなその庭園を散策する語り手は、老年期に差しかかった現時点にあって少年時代の記憶とその当時の感情をありのままに呼び覚ますことができ、一時的にではあるが過去と現在を隔てる距離が消え、過去に回帰できたかのような印象を覚えるのである。

> 私はカバノキの枝の天辺に留まった一羽のつぐみのさえずりで、内省から引き出された。その瞬間、その魔術のような音は私の目に父の領地を出現させた。私は自分が目撃したばかりの様々な大惨事を忘れ、過去に突然連れ戻されて、しばしばつぐみがさえずるのを聞いた田野を再び見た[19]。

故郷の森で以前に幾度も耳にしたつぐみの鳴き声を契機として、シャトーブリアンはコンブールで過ごした少年時代全体が突如魔法のように甦るのを感じる。そして彼は当時の感情と感覚を鮮明に思い起こし、失われた過去を見出された時間として実感するのである。時間的には過去と隔たっていたとしても、人生の異なる時期に同じ感覚を体験することによって、人生の二つの時期に対応関係が生じ、それゆえに人生の連続性を自覚することができる。このように、ここでは半ば忘却の淵に沈んでいた少年時代にまつわる遠い記憶が、意識的にではなく無意識のうちに偶然に蘇る奇蹟のような感覚として巧妙に配置され、描かれているのが確認できよう。

4. 象徴的な自伝の意図

そのような感情的記憶には、様々な記憶を相互に重ね合わせる想像力の運動によって、年代上は隔たった二つの異なる人生のある瞬間や出来事を

---

[19] Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, p.203.

関連づけるという機能もある。シャトーブリアン自身、個人的次元と集団的次元を融合させて時代の叙事詩として回想録を構築する意図があることを「遺言としての序文[20]」でも表明しているのだが、それは自己を一つの時代または世代全体を代表する寓意的な存在として描いたり、アダム、モーセ、アエネイアスなど西洋文化圏における象徴的な人物像に擬えたりすることによって自己を形象化する手法である。作者の意図は、個人の生を語る回想録の中に歴史的次元の記憶を含めることで、作品を象徴的な人生経路とすること、そして大革命の動乱により破壊された旧世界から、革命後の新たな世界へ移行してゆく過渡期の旅人であり、二つの時代をつなぐ仲介者として自己を位置づけて語ることにある[21]。したがってシャトーブリアンにとって過去を細部に至るまで厳密に再現することよりも、自分の意図に合致する象徴的な肖像を鮮明に打ち出すことが優先される。少年時代の逸話を語る際にも、文化的・集合的な記憶を拠り所にして、自己の人生と神話上の人物の間に存在する類比関係を出現させるのである。ジャン・クロード・ベルシェも指摘するように、シャトーブリアンは彷徨えるユダヤ人の形象に自己を擬えて、それに則して少年時代の逸話を編成している[22]。そのような象徴化の技法によって、歴史的な宿命性という印象や叙事詩的な格調が醸し出されるのだが、それだけでなく個人的な放浪や喪失体験を全人類規模の神話に仮託して語っているので、個人にはより普遍的な次元が付与されることにもなる[23]。

---

[20] *Ibid.*, p.846.

[21] 象徴的な自伝という主題については、ジャン・クロード・ベルシェによる以下の論文を参照のこと。Jean-Claude Berchet, « *Les Mémoires d'outre-tombe* : une autobiographie symbolique », pp.39-69. *Le Moi, l'Histoire 1789-1848*, Ellug, 2005.

[22] Jean-Claude Berchet, « Le Juif errant des *Mémoires d'outre-tombe* », *Revue des Sciences humaines*, n.102, avril, 1995, pp.193-213.

[23] 例えば『回想』三巻末尾のコンブールから出発する場面では、語り手はミルトン『失楽園』の一節、楽園から追放されたアダムについての箇所を引用し、少年時代の楽園からの追放と未知の世界での放浪というニュアンスを付与している。（Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, *op. cit.*, t.1, p.235.）

また少年時代を語った箇所では、老境にある現在と過去とを絶えず対照させ、隔たった時期の間を往復するという技法も認めることができる[24]。そのような記憶の性質は、自己の連続性を保証するというよりも、様々な記憶を並置し、重ね合わせることで、テクスト構造の内部で過去と現在とを反響させ、時間の深淵を覗かせるのである。人生の様々な段階の自己及び他者との想像上の対話を通して、有為転変の掟に従属しているかに見える自己の細分化された人生にも、全体的に見れば一貫性が出てくることになる[25]。こうして様々な時間と場所とが重なり合い、現在と過去が入り混じるという記憶の循環的な重層構造によって、自我の内的な統一性がもたらされるのである。

このように自己の人生の記憶の中だけでなく、自分とは異なる時代に生きた人々の人生の間にも照応や類似を積み重ね、異なる年代を往復できるように記憶を配置し、語り手の記憶を異なる時代の他者の類似した記憶に重ね合わせ反響させるのである。シャトーブリアンは、自己の心の秘密を探る際に、自己の内面そのものを凝視するというよりも、他人の人生との類似した体験の反響を通して自画像を構築しようとする傾向にある。これらは記憶の地層状の堆積、またはパリンプセストという概念によってしばしば語られる記憶の性質である[26]。異なる時代の痕跡を留める各々の記憶が関連し合うことで、連続的な組織網が構築され、自分の人生のある出来事と、異なる時代を生きた他人の類似した人生のある出来事との間に照応関係が生じることになる。

---

[24] 異なる人生の間に類比関係を打ち立てる技法は、シャトーブリアンの文体上の癖ともいえるが、その点についての全般的な考察はリシャールに詳しい。（Jean-Pierre Richard, *Le Paysage de Chateaubriand, op. cit.*, pp.121-140.）

[25] このような効果こそ、作者自身が『回想』の序文で述べている「一種のえもいわれぬ統一性」に他ならない。（Chateaubriand, *Mêmoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, p.118.）

[26] *Ibid.*, p.148.（「出来事が出来事を消す。他の碑文に書き込まれた碑文、それらはパリンプセストの歴史のページをなす。」）

モンボワシエ庭園でも、語り手は嘗ての住人ガブリエルとアンリ 4 世を想像する。彼らも 200 年前には自分と同じくその場所で夕日を眺めていたであろうという連想が働く。そして彼らの運命に、自分も執筆中の『回想』が出版された時、つまりは死の中で合流するであろうと想像する。他にもコンブールを立ち去る前に再訪したサン・マロでは、浜辺を物悲しく散策しながら、800 年前には自分と同じく陰鬱な瞑想に耽りつつ散策していたアベラールに思いを馳せる[27]。そのような相異なる時代の記憶の反響の中を自在に横断することで、断片的な人生に秩序と統一性を認めようと意図しているようである。このような地層状に重なる時代の間の反響から醸し出される統一性は、自己の存在の連続性と回想録の語りの一貫性を保証するものである。

5. 記憶の想起の空しさと文学創造の原動力

様々な記憶が重なり合うパリンプセストでは、確かに過去の記憶としての古い文字は消されることなく、その痕跡を新たに書き込まれた文字の背後に透かして読み取ることができる。とはいえ、やはり別の記憶が上書きされてゆくと同時に古い記憶は部分的に消去され、忘却されてゆくものであり、完全な状態で保存されるわけではないこともまた確かである。

モンボワシエ庭園でつぐみの鳴き声を聞く場面にしても、シャトーブリアンは数十年の時の隔たりを越えて故郷の領地と失われた少年時代が奇蹟のように甦るのを実感し、強烈な感動を覚える。しかしすぐさま記憶が人生の連続性を保証するものではないことに思い至るので、その感動は永続きしない。一瞬であれば時代の隔たりが消滅し、過去に連れ去られた感覚があっても、その直後には、現在も過去も悲しみの感情は共通していたことを語り手は認める。その内実とは、嘗ては未経験の状態にあって漠然たる欲望に起因する悲しみであったが、現在では追い求めた幸福が到達不可能であり、無意味なものであると悟った幻滅ゆえの悲しみである。空しい欲望の高揚感に苛まれていたために人生は始めから疎外されたものとなっ

---

[27] *Ibid.*, p.234.

ていたこと、そのため青年時代を空費してしまったことを、彼は苦々しく自覚することになる[28]。

ここでも記憶の想起は、自己の生存が空虚であり、歳月は失われてしまっていることを暴露する。人生の様々な瞬間を往復することは、複数の自己に分裂した自我の不連続性を認識させる[29]。記憶の中で人生は相異なる反映に分散し、それらを再統合する術もないので、人生は根本的に惨めなものであることに変わりはない。記憶に依拠して、自我に永続的なものとされる自己意識の基盤を認めようとしても、結局は自我の不連続性という宿命から免れ得ないことに思い至るのである。記憶を忘却するというよりも、記憶が相互の関連性もない断片的な性格であることが悲嘆の原因となる。ディエップはシャトーブリアンが定期的に訪れ、その度に人間の運命の有為転変について瞑想する象徴的な土地であるが、そこでも数年後に訪れた時には、もはや自分自身が同一ではなく、別の存在になっていることを自覚する。「ディエップには自分がいなかった。既に他の自己となっている。その場所に嘗て住んでいたのは、他の自己、過ぎ去った最初の日々の自己であるが、その自己は死んだのだ。というのも、われわれの歳月は、われわれ以前に死ぬ[30]」のであるから、嘗ての自己をもはや見出すことはできない。過去の痕跡を求めて何度か以前に自分が過ごした場所を訪れてみても、すべては現実の事物の儚さ、万物に不可避の転変と崩壊という強迫観念を強めるだけである。

このように記憶を想起することは、過去の痕跡を殆ど留めないほどに事物を変化させてしまう時間についての痛切な認識を抱かせるに終るので、自我に連続性を認めようとする意図も幻想に過ぎないことが明らかとなる。せいぜいのところ人生の様々な時期の自我の残骸を集めるに過ぎないが、

---

[28] まさしく「歳月は流れ去り、自分を押し流す」（*Ibid.*, p.204.）のである。

[29] 自分の生地サン・マロを再訪した際にも、シャトーブリアンは「人間は唯一の人生を持つのではない。人間は合計して複数の人生を持つのである。それが人間の惨めさである」（*Ibid.*, p.234.）と痛感する。

[30] Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, *op. cit*, t.2, p.18.

それも同じく絶え間ない転変に晒された人生の空しさと脆さとを露呈させる[31]。

また、過去との断絶感を更に深刻なものとする外的要因として、歴史的次元の断絶、つまり大革命時代に蒙った貴族階級への暴力と迫害を挙げることもできよう。シャトーブリアンの少年時代は、将来への何らかの展望もなく、失敗と挫折による進路変更のために断絶の連続という印象が強いのだが、そのような個人的要因のみではなく、相次ぐ政治上の動乱も、万物の儚さについての悲劇的な認識へと至らせるのである。モンボワシエ庭園では、革命時代の蛮行の痕跡を留める廃墟のような風景にも言及されている。こうして少年時代は決定的に取り戻すことが不可能な、過ぎ去った遠い時期として自覚される。語り手は、少年時代の記憶を郷愁と共に思い出すだけでなく、自分が目撃した幾つかの政体の興亡を古代ローマの廃墟と類比させて語っているように、あらゆる文明に必然的な滅亡についても思いを巡らせている[32]。

こうして記憶によっては失われた時間を取り戻すこともできず、現在と過去は、両者を隔てる無限とも思われる距離によって結びようもなく隔絶していることを自覚せざるを得なくなる。決定的な喪失または別離として感じられる過去も、記憶の深淵に沈んだ遠い存在も、完全には蘇ることがない。そして記憶を想起することは喪失と別離の総量をより克明に痛感することであり、たとえ滅びてしまった存在や場所を書き残すことによってそれらを忘却から救い出すことができたとしても、やはり捉えようもなく

---

[31] シャトーブリアンの記憶の性質について、リシャールは以下のように定義している。「想起された過去の不安定さ、想起する現在の流出、一方から他方へとすり抜ける流動的な断絶、縮小しつつある未来についての直観、死が差し迫っていること、それらが、記憶の両義的な＜魔術＞がシャトーブリアンにもたらすものすべてである。」（*Le Paysage de Chateaubriand, op. cit.,* p.108.）

[32] 断絶はテクスト構造の内部にも同様に現れている。『回想』の 3 巻執筆の時期は、それ以前の 2 巻分のテクスト執筆した時の状況とは一変している。ナポレオンによる帝政の崩壊と、それに続く一連の政治的動乱、およびシャトーブリアン自身の心境の変化とも相俟って、断絶意識はさらに拡大している。

逃げ去る過去をありのまま再現することは不可能なのである。もとよりすべての体験と記憶を書き留めることはできず、仮に僅かながらそれが可能であったとしても、等しく忘却と消滅の宿命から免れ得ないという諦念がある。少年時代を想起する際に付随する憂愁とは、そのような記憶の脆さとエクリチュールの能力の限界を自覚することに由来するものであろう。記憶の想起とは、万物の必然的な消滅に直面した際の絶望と無力感を増長させるのである。書くことによって滅亡した事物に完全な不滅性を付与できるわけではなく、時間の中で消滅した事物の幻影を束の間であれ出現させる程度のことしかできない。

とはいえ、断片的で儚い過去しか呼び覚まさない記憶の想起が、いかに悲観的な洞察へと導くものであっても、またそれはすべてを忘却へと押し流してゆく時間の経過の中で、自己の連続性の意識を束の間であっても自覚させもするので、自己を語るべく文学創造へと向かわせる原動力としての効用もそこに認めることができる。実際、シャトーブリアンはモンボワシエ庭園でつぐみの鳴き声を聞いた時には、時間に急き立てられるように感じ、少年時代の思い出が遠く離れてしまう前にそれを語ってしまおうと決意する。

シャトーブリアン自身も、記憶の儚い反映によって構築された『回想』は、「骨と廃墟で建てた建造物[33]」であり、やがては忘却と消滅を運命づけられた記念碑にも等しいものと看做している。それでもその自覚は、万物に不可避の消滅という強迫観念へと作家を閉じ込め、言葉によって文学作品を構築することの空しさを痛感させるだけ、というわけではないだろう。記憶を書くことは、自分の人生を再構成し、書かれることがなければ束の間に消えゆく人生の儚い思い出の反映を、言葉の魔力によって芸術作品の統一性の中に固定し、永続化すること、それにより自己同一性の記念碑的作品を打ち立てようとする試みである。たとえその試みも空しいものであるという認識があったにせよ、作品には人間の生命以上に永続性が保証されているのである。

---

[33] Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe, op. cit.*, t.1, p.344.

『回想』の中では、このような連続的な死としての生存を余儀なくされた人間の運命の儚さと、人間の生命よりも永続する人為による建造物の永続性という対照の構図を至るところに見出すことができる。建造物も同じくやがて崩壊するとはいえ、そこに住む人間よりは永い寿命を約束されている。同じような比喩は、コンブールの秋の光景を語った箇所でもなされている。シャトーブリアンは農作業に勤しむ無名の農夫の姿を目にして、死に脅かされた人生の儚さ、更には自己の運命をもそこに投影して瞑想する。

> 私は休閑地の端に、誰か農夫を見ただろうか。穂の陰で芽を出したようなその男を眺めるために私は立ち止まった。彼は穂の間で刈り取られるのであろうが、自分の墓である大地を犂先で耕し、秋の凍てつく雨に燃えるような汗を混ぜていた。農夫が掘っていた畝は、彼の死後も存続するはずの記念建造物（monument）であった[34]。

死を暗示する不吉な印象に支配された風景であるが、ここで農夫が大地に掘る「記念建造物」としての畝とは、墓をも暗示しているのだろう。この場面で、凋落の季節である秋の侘しい風景と、それを観照する者の内面の物悲しい心境との完全な交感の境地に入っている語り手は、外面の風景に自己の内面の感情を投影し、それらを相互に融合させて秋の光景を描写している。やがて自分が眠る墓としての大地に畝を掘る農民の営為は、モニュメントとしての回想録を書いているシャトーブリアン自身の姿とも重っているようである。農夫が大地に掘る畝とは、すぐさま消え去る定めにある脆い痕跡である。その畝でさえもが、それを掘る農民の生より永続するものとされているのは、多少奇異な印象を抱かせないでもないが、それは人間の生の儚さと作品の持続とを対照させつつも、その両方が等しく脆いものであることを暗示している。ともあれここでの畝とは、どれほど僅かながらではあっても作者の生よりも持続する文学作品のメタファーとな

---

[34] *Ibid.*, p.226.

っているようである。

シャトーブリアンには、『回想』もやがて迎える忘却と消滅を受け入れざるを得ないという諦念が根底にはあるのかも知れない。仮に作品が時間の破壊作用を免れ、外見上は保存されたとしても、本来の意味が失われた記念碑や、誰にも理解されなくなった言語のように、廃墟同然に孤立状態の中に打ち棄てられるのであれば、それは忘却の虚無と変わりがないからである[35]。

『回想』は、すぐさま消えゆく殆ど虚無にも近いような事物や既に失われてしまった対象の影像によって建てられた記念建造物としての作品である。しかしながら、語ることで虚無以外の何らかの意味を目指し、虚無によって惹き起こされる喪失感や喪の悲哀から、永続性を約束された意味のある作品へと昇華させ、文学創造によって虚無から脱するという逆説がそこにあるのも確かである。リシャールも示唆しているように[36]、文学による再生という主題、つまり文学に自己を捧げることによって現実を断念し、現実の次元においては死ぬこと、そしてその代償として作品の中で永久に生き続けるということ、そのような文学の効用も指摘できる。墓の彼方に自らを位置づけるというシャトーブリアンの語りの姿勢は、現実の無慈悲な時間的秩序と束縛から一定の距離をとり、周縁的であるが達観した立場から、個人的及び歴史的次元を含め現実の対象すべてを、突き放した皮肉な視線によって観察することである。そのような語りの姿勢はまた、言葉の超越性への信頼によって時間を超え、死の虚無に抵抗する意図を含意しているといえるだろう。

---

[35] このような万物の虚無をめぐる瞑想は、廃墟の光景を前にして頻繁に語られているが、とりわけ言語の滅亡という久しくシャトーブリアンにとり憑いている強迫観念については、『回想』7 巻 10 章（*Ibid.*, pp.421-422.）を参照のこと。

[36] Jean-Pierre Richard, *Le Paysage de Chateaubriand, op. cit.*, p.45.